

民間企業経験が社会科教師に及ぼす影響

— 民間企業経験を持つ教師へのライフストーリー調査を用いて —

池田 岳史（福井県越前町立糸生小学校）

渡部 竜也（東京学芸大学）

I 問題の所在 —民間企業経験が教師の教科指導にもたらす効用とは何か—

社会の変化に伴い、学校教師に求められる資質・能力も多くなっている。それと併せて、近年、教員採用においても、特定の資格や経歴等を持っていることで一部試験免除や特別選考などの採用枠を設ける自治体が増えてきており、平成 29 年度の文部科学省の調査では、全国 68 の全自治体で一部試験免除、加点制度及び特別の選考が実施されていることが明らかにされた。その中で、民間企業等の勤務経験を対象にした特別の選考が 51 の自治体で行われており、全国的に見ても民間企業経験者の需要が高まっていると言える¹。また、都道府県教育委員会の実施する教員への研修においても、教員の民間企業研修を行う自治体が増加している²。こうした傾向について斎藤（2014）は「民間企業勤務などの経験のある教員が、そうでない教員よりも優れているかどうかは議論のあるところ」との留保条件を付けた上で、それでも「社会の多様化が進む中で、学校組織が均一的・画一的にならないようにするため、一定の割合で社会人経験のある教員が存在する意義は大きい」と述べ、一定の評価を与えている。そこで筆者らは、民間企業での経験が学校現場で強みとして現れてくることがあるとすればそれは何か、と複数の民間企業経験のある教師たちに対して率直に尋ねてみた。その時、彼らから幾度となく挙げられたのは、「保護者対応や事務作業、進路指導などには自信をもっている」という発言であった。では、民間企業経験は教師の教科指導にはどのような影響を与えるのだろうか。このような問題意識から筆者らは、特に民間企業の経験がプラスに働きやすい教科の一つと考えられる社会科に焦点をあて、民間企業経験は社会科教師にとってどのような影響があるのかを探ることにした。

II 研究方法

本研究では、社会人特例選考を経て社会科教師として公立中学校に勤務している 3 名の現職教員（東京都）にライフストーリー³の聴き取りを行い、民間企業等での勤務経験がその教師の社会科についての教育観の形成や教科指導にどういった影響を及ぼしているのかを、筆者らが解釈していくという研究方法を採用した。

この方法を採用したのは、消極的、消去法的理由からである。というのも、今回調査に協力して頂けた 3 名の現職教師たちから頂戴した指導計画や参与観察した授業実践からは、彼らの企業経験が生かされたと考えられる側面を特に見つけ出すことが殆ど出来なかったからである。そこで筆者らは、彼らに企業経験を含むこれまでの人生を振り返ってもらい、そうした人生経験が教科指導にどう生きているのかを、彼ら自身に語らせるという方法（思考発話法）を採用した。そして、被験者 3 名それぞれの語りをコード化し、各教師が民間企業経験を経て社会科教師になるまでの径路を TEM 図⁴にまとめて比較・分析した。

III 被験者の特性

本研究の被験者はいずれも民間企業での就労経験を有し、現在東京都の公立中学校で社

会科を担当している。彼らのライフストーリーの聞き取りは、2017 年 7 月～12 月の期間に実施された。事前に聴き取りたい主な内容をメールにて伝えた上で、1 人あたり 2 時間程度の聴き取り調査を 1 回、1 時間程度の聴き取り調査を 1 回、計 1 人あたり 2 回の調査を実施した。1 回目の調査では、社会科教育観を生い立ち特に民間企業での勤務経験に着目しながら自由な発話の中で、適宜、質問しながら聴き取った。2 回目の調査では、1 回目の調査後に筆者が作成した仮の TEM 図を用いて聴き取り、意見交流を行った。また、2 回目の調査での語りを参考にして TEM 図を再検討しメールでのやり取りを行い、よりトランスビューな TEM 図を作成した。調査時の 3 人の被験者の年齢、性別、大学での専攻、民間企業就職歴、教師歴は【表 1】の通りである。

【表 1】調査対象者一覧

	年齢	性別	大学専攻	民間企業職歴	教師歴
A	40 代前半	女	法学	4 社 計 7 年	1 校 6 年目
B	40 代後半	男	日本史	3 社 計 15 年	2 校 8 年目
C	30 代前半	女	法学	1 社 7 年	2 校 5 年目

【表 2】TEM における被験者数（安田・サトウ，2012）

被験者数	利点
1 人	個人の径路の深みをさぐることができる
4±1 人	経験の多様性を描くことができる
9±2 人	径路の類型を把握することができる

本研究で A～C の 3 名の被験者となる教師を選定した理由は次の 2 点である。第一に、TEM おける被験者の選定は歴史的構造化サンプリングに依拠しており、選定の際には

同じような経験をした人、すなわち、本研究では「民間企業に就職してから社会科教師になった者」としたためである⁵。第二に、民間企業経験を持ちかつ現在も中学校社会科の勉強会に参加する等、社会科授業に熱心であると予想される教師の事例を明らかにすることで、参考にできる有用な視点も得られやすくなると考えたからである。また、本研究における被験者数は、もともと TEM による研究において対象者は目的に応じて【表 2】のように変化するものとされ、本研究は個々人の径路を深くみていきながらも経験の多様性を描くことを目的としたことから、3 人とした。

IV ケース① —教師になることを念頭におかず民間企業へ就職した A 教師—

（1）A 教師の語るライフストーリー

A 教師は、東京都の公立中学校で働く現在教師歴 6 年目の女性教師である。大学では、法学を学び、その時に中高の社会科教員免許と、フィナンシャルプランナーの資格を取得している。社会科教師をする以前は民間企業 4 社に計 7 年務めていた。民間企業では、保険やクレジットカードの営業業務、文章を編集する業務などに従事していた。これまで、中学校の社会科では地理歴史公民を全て担当しており、現在は 1・2 年生の「地理」と 3 年生の「政治」を主に教えている。以下は、A 教師自身が語る、〈社会科教師になる〉までの径路の一部である。

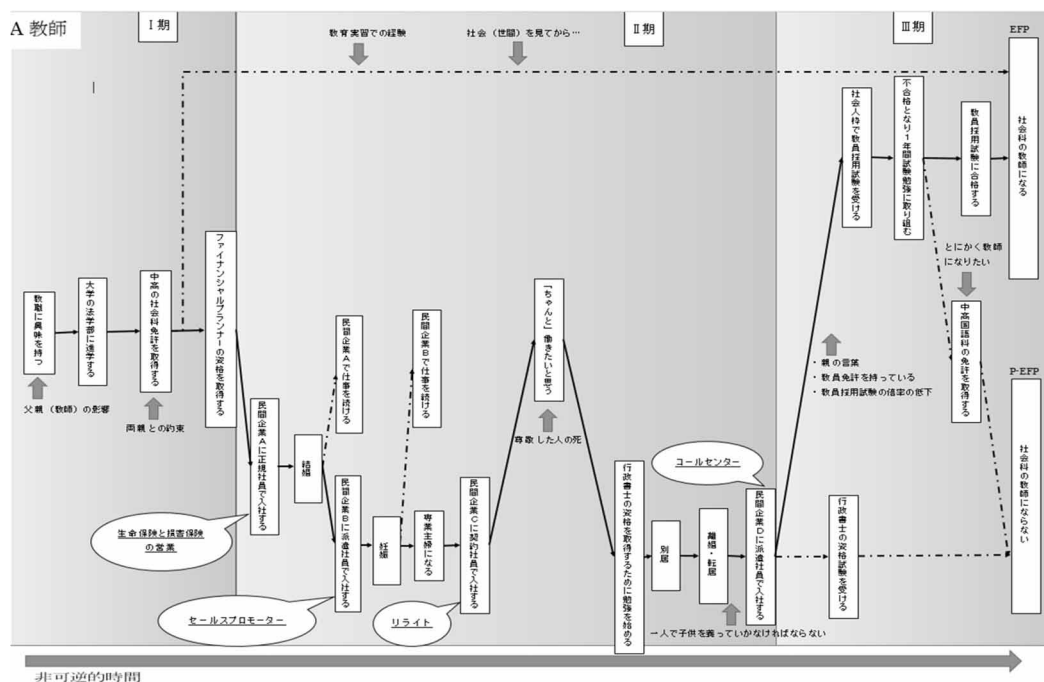
※：免許取ることは決まっていたんですか。

A：親との約束で決まっていて、強制だったんですよ。私は、その気はなくて部活だけしたかったんですけど、大学4年間で部活だけやられたらたまらないと言われて、教員採用試験とか、なるならないは別として何か資格をとってと言われて。で、教員免許を取りなさいと言われて。最初は2つだけ。中学校の社会と高校の地歴だけを取ってたんじゃないかなと思うんですけど。で、やっと親を説き伏せて、大学3年の時にやめたいって言いに行ったら、教職課程の先生から全部の免許をとってからやめろと言われて、単位一つでも落としたら辞めていいよと言われたんですよ。そしたら単位落とさなくて全部とれたんですよ。なので、その時のおかげで今があるんですよ。私の意志ではなかったですね。

※：社会科の先生になられたじゃないですか。免許で社会を取ろうと思ったのはなぜですか。

A：「即答で」法学部だったんで社会しか取れなくて。別に社会以外でも。ただ、国語の教員採用試験も1回目落ちた時に、社会って厳しいって聞いたんで、たまたま予備校での無料の説明会、相談会があるって聞いたら、（予備校の先生から）奇跡だねって君が受かったら奇跡だねって言われて（微笑）、結構落ち込んで帰ってきて、で、1年間本当に勉強して社会で受かるよりは国語とか他の教科で受けた方がいいんじゃないかなっておもったこともありまして。で、通信で免許取るための資料を取りに行ったりしたんですよ。でも、「国語をやるぐらいなら社会科でちゃんと勝負しろ」って、勉強を見てくださいって先生に言われて。受かる人はどんなに狭き門でも必ず受かるからって。「自分がそこまで達してないからって国語をやる努力、時間があるなら社会で頑張れ」と言われて。

こうした語りを基に、等至点（EFP）、分岐点（BFP）、必須通過点（OPP）、社会的方向づけ（SD）、社会的ガイド（SG）を抽出し TEM により図化したのが【図1】である。



【図1】 A教師のライフストーリーのTEM図

A教師は、〈教職に興味を持つ〉に至るには、父親が教員だったことが影響している。ただ、A教師は興味を持った程度で教師になりたいという思いはほとんどなく、大学進学の際には、「弁護士になりたい、司法試験を受けてみたい」と考えたことから法学部に進んでいる。これまでA教師は小中高校で知識の暗記が中心の社会科授業を受けてきたこともあり、学校の授業に強い印象を受けていない。大学では、本人は4年間部活（弓道部）に打

ち込みたかったが、それでは困るという両親の意見から、〈中高の社会科免許を取得することになった。当初は中学校の社会科と高校地歴の免許の2つのみの取得しか考えていなかったが、教授との関りから高校公民の免許も取得している。ただ、社会科の免許を取りたい気持ちは「あんまりなかった（笑い）」という。

A 教師は、学生時代に取得した2つの資格の、どちらを生かして働くのかを悩んだ。その際、〈教育実習での経験〉や「社会の教員になるなら実際に社会に出て世の中を知ってからの方がいいかな」という思いから、教員にはならず民間企業への就職を決断する。民間企業 A は「(学生時代に取得した) ファイナンシャルプランナーの資格(を活かせる)とか人の人生設計とか、人の一生に関わりたい」との思いと、当時の世の中のニーズとを考えて就職を決めている。民間企業 V では、転勤のない正規社員で入社し主に生命保険や損害保険を個人や法人に営業していた。その際、ノルマを達成することの困難さや、夜の10時まで働かされたり休日にも上司から仕事の電話がかかってくるなりと企業をブラックな一面などを経験した。その後、〈結婚〉を機に転居することとなり民間企業 A を退職し民間企業 B に就職した。民間企業 B では、自社のクレジットカードの販売を主に行っていた。しかし、〈妊娠〉を機に、企業の方から「何かあったら困るから」という理由で契約を切られたという。その後、出産を経て専業主婦となったが、子どもを寝かせてからでもできる仕事として民間企業 C の契約社員となった。そこでは、リライトと呼ばれる、依頼通りに文章を書いたり、編集したりする業務に従事した。しかし、仕事は不定期で賃金も低かったことや、尊敬していた同僚が若くして亡くなったことが影響し、〈ちゃんと働きたい〉と思ったという。そこで、定職に就くために行政書士の資格を取ることを決め、〈行政書士の資格を取得するために勉強を始めた〉。しかし、家庭環境の変化(〈別居〉〈離婚・転居〉)もあり、〈一人で子どもを養っていかなければならない〉ことになり、〈民間企業 D に契約社員として入社する〉。

A 教師は、TEM 図からも分かるように、民間企業 B 以降は正規社員以外での雇用形態で働いている。そのため、常に正規で〈ちゃんと働きたい〉という思いはあり、〈離婚〉を機にその必要性が高まった。加えて「子ども2人を養うためにちゃんと働きたい」という思いも影響している。そこで、資格を取り正規で働こうとしていたところ母親から、「〈母親の言葉〉いつ受かるかわからない行政書士よりも、〈教員免許を持っている〉のだからその部分の過程は省けるんじゃない」という言葉をかけられ、さらに、〈教員採用試験の倍率の低下〉も要因となり、〈社会人枠で教員採用試験を受ける〉ことを決めた。結果は不合格となるが1年後には必ず受かると決めた。ただ、一時は〈とにかく教師になりたい〉という思いから倍率が社会科よりも低い国語科での受験を考え、中高国語科の免許を取得することなども検討したという。その際、周りの方の言葉もあり社会科で受けることを決め、〈社会科教師になる〉という結論に落ち着いている。

A 教師は社会科という教科に対する強い拘りやヴィジョンは持っておらず、行き当たりばったりの中で偶然社会科教師になったと言えるだろう。言い換えれば、社会科教師になるということと民間企業経験はあらかじめ結びついていたのではなく、多くの経験を経て偶然結びついたと言える。

(2) A 教師が語る自身の民間企業経験の教科指導への影響

A 教師は民間企業での経験について、学校の教科指導においては、【表3】のような形で生かされていると語っている。

【表 3】A 教師の民間企業経験の活用に関する語り

社会科授業	・「3 年生の公民のところは自分が世の中を経験しているので、実際に自分も経験したのでみたいな形で、ちょっとネタ的にね。」（例、ブラック企業・マタハラなど）
その他	・「総合とかの進路学習とかですかね。自分がどういう風な経験をしたとかね。自分がこういう選択をしてきたんだよとかを話すと、子どもは興味持ちますね。」 ・「保護者対応とかにも生かされていると思います。」 ・「社会人経験の中で営業やったりリライトの仕事したりしたのってみんな役に立ってるんですよ。生徒の書いた面接の文章とかを読んで、あなたが言いたいことはこういうことじゃないって聞いてそういう風に変えてあげることができる」

このような A 教師は、社会科について例えば次のように語っている。

※：たくさん社会科を教える中でどういうことを学んでほしいとかはありますか。

A：そうですね。（あ）努力、、、社会科を通して学んでくれたら一番うれしいんですけど、努力できるようにってほしいなっていうのを授業を通して。6 年間で一番多く言った言葉って努力じゃないですかね。可能性はいっぱい持ってるから、その可能性を可能にかえるのは努力だと思っているので、努力しようね、努力してねって、その努力が認められるのも学生のうちだけじゃないですか、社会人になったら努力って当たり前じゃないですか、だから、その頑張りを努力を誉めてあげられる期間身に付けて欲しいなってことと、あとは、世の中に興味を持ってほしいなって。自分が暮らしている日本であるとか、それから世の中で起きているニュースであるとか、そういうのを人ごとに捉えるのではなくて自分の考えとか持ってほしいなとか興味関心をもってほしいなって。

A 教師は社会科という教科が単なる知識の暗記にならないようにしたいという。そして、そのために常に生徒の反応を見ながら生徒とのやり取りの中で授業を進めていくことが理想であると考えている。加えて、社会科の授業を通して世の中に興味を持ってほしいと述べている。そして A 教師は、「グループでの学び合い活動」や「新聞のスクラップ」、「授業の中で新聞記事を取り入れる」といったような工夫を行っている。

A 教師の語りを聞く限り、A 教師は今現在でも、「社会科」を通して子どもに育成したい力について具体的なヴィジョンを描けているとは言い難い——暗記は避けて、子どもの間でやり取りのある授業をさせ、社会に関心を持ってもらいたいという、やや漠然としたものに留まっている。それは、上の下線部（あ）にあるように、社会科の授業で生徒に身に付けて欲しいことについて、真っ先に「努力」という発言したことからもうかがえる。「努力」は社会科だけでなく、教科全体で身に付けていくべき姿勢である。

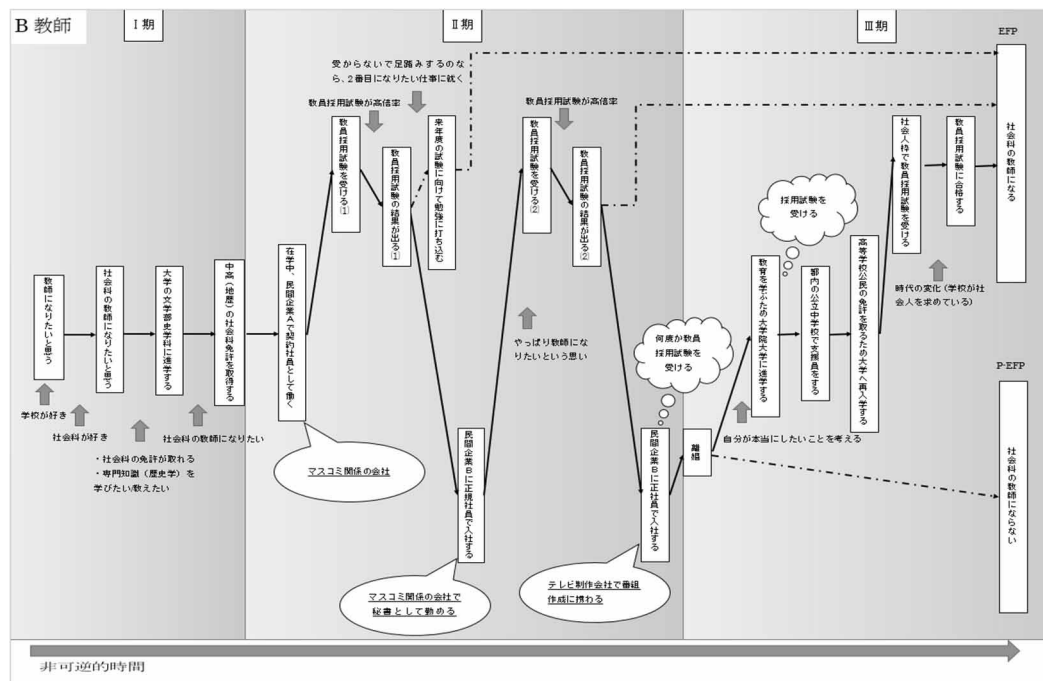
（3）A 教師のライフストーリーと教育観の関係

このような A 教師の教育観はどのように形成されてきたのだろうか。考えられるのは、A 教師が中高で受けてきた社会科授業への不満が A 教師に与えた影響である。A 教師は学生時代、知識の暗記中心の社会科授業を受けてきたという。社会科に対する思いを訪ねた際にも A 教師は「（子どもの頃は）勉強しなければいけないもの、覚えなければいけないもの。受験に必要なもの（と、思っていた）。でも、教員になったら社会科って幅広いんだなって」と語っており、当時の社会科授業への不満が見える。しかし、社会科で育てたい子どもの能力について具体的なヴィジョンを描けていないためなのか、暗記を回避するための代替案はやや漠然としている。そしてそこに、民間企業経験が生かされた形跡をほとんど見つけることが出来ない。この後登場する B 教師、C 教師と比べても、A 教師の語りには、全体的に自らの経験と社会科の教科指導とを結びつける発言が極めて少ない。

V ケース② ―教師になることができず民間企業へ就職した B 教師―

(1) B 教師の語るライフストーリー

B 教師は、東京都の公立中学校で働く現在教師歴 8 年目の教師である。中学生の頃に社会科教師になりたいと考え始めたという。大学では社会科の中でも最も興味があり得意、好きであった歴史（日本史）を学ぶため、そして社会科の教員になるために文学部の史学科に進み、日本史の専門知識を身に付けたという。社会科教師をする以前は民間企業 3 社に計 15 年務めていた。民間企業では、マスコミ関係の会社やテレビ制作関係の会社で働かれ、出演者のキャスティングや番組の構成を考える業務に従事した。これまで、中学校の社会科では地理歴史公民を全て担当しており、現在は 1・2 年生の「地理」「歴史」を主に教えている。B 教師の語りを基に、等至点、分岐点、必須通過点、社会的方向づけ、社会的ガイドを抽出し、TEM により図化したのが下の【図 2】である。



【図 2】 B 教師のライフストーリーの TEM 図

B 教師は、中学生の時、社会科が得意（点数が取ることができた）であり、興味もあったことから好きになった。〈社会科の教師になりたい〉という思いは強く、学校で受けていた社会科の授業についても強い印象を持っている。授業は基本的には講義形式で行われていた。B 教師は「自分だったらこう教えるのになあとかを結構思いながら授業を受けているんですよ」と語っており、早くから教授法に関心があったことが伺える。高校卒業後は、「〈社会科の教師になりたい〉」という夢をかなえるために、また、〈専門知識（歴史学）を学びたい/教えたい〉という思いから、社会科の免許が取れ、かつ、歴史学を専門的に学ぶことができる K 大学文学部史学科へ進んでいる。

B 教師は、大学在学中にマスコミ関係の仕事を行う民間企業 A で働いた。卒業後は、社会科教師になるため、複数の自治体で〈教員採用試験を受ける〉が、〈教員採用試験が高倍率〉であったことなどから不合格となる。そこで、〈来年度の試験に向けて（一年間）勉強に打ち込む〉か、民間企業で働くかで悩む。その際、B 教師は前者の道に進み「働く」ことに対して 1 年間足踏みをするなら 2 番目になりたい仕事に就くという思いがあったので

マスコミ関係の仕事を行う民間企業 B へ就職する。この決断について、B 教師は「余計なロスをしたくなかった」と振り返っている。民間企業 B では秘書として勤務している。その後、〈やっぱり教師になりたいという思い〉や仕事が合わなかったなどの理由で、民間企業 B を退社し再度教員採用試験を受ける。しかし再び不合格となり、民間企業 C へ就職する。民間企業 C では、テレビ制作の仕事に従事し、具体的にはロケ地選定のためのリサーチや、キャスティング、全国各地へのロケなど行い番組を制作していた。また、バラエティー番組に関わることも多く視聴者を楽しませることためにいかに面白く伝える“しかけ”に拘りを持つようになったという。

結局 B 教師は計 3 社の民間企業を経験している。B 教師は、その間も、教師になりたいという思いが捨てきれず、何度か教員採用試験に出願している。しかし、合格はもらえず民間企業で働いていたが〈離婚〉を機に、〈自分が本当にしたかったことは何かを考え〉教師になることを決断している。B 教師にとって、離婚だけが教師になろうと思ったきっかけではないが「離婚は大きなきっかけ」の一つであった。そこで、B 教師は、内容の専門知識ではなく教育について学ぶために〈教職大学院に進学し〉、教育現場での経験を積むために〈都内の公立中学校で支援員をし〉、〈公民科の免許を取るため大学へ再入学し〉ている。大学院では、民間企業経験を持つ教師を志す友人と共に学び、自らの民間企業経験を教育にどのように還元していくかについて考え、議論している。また、支援員の経験では、実際の教育現場に入り、他の先生がやられている授業を見る経験を得た。これらの教育に関する学びを生かし、また、〈時代の変化（学校が社会人を求めている）〉ことも影響して、〈社会人枠で教員採用試験を受け〉て〈社会科教師になる〉に至っている。

（２）B 教師が語る自身の民間企業経験の教科指導への影響

B 教師は民間企業での経験について【表 4】のように生かされていると語っている。

【表 4】B 教師の民間企業経験の活用に関する語り

社会科授業	・私は見せることにはこだわりを持っている。どう見せるかどう構成するか 50 分の授業の中でどう驚かせて刷り込むかとかには徹底的にこだわりますよ。 ・（テレビ制作での話・前略）歴史の授業ではなるべく本物をもってきて見せる。自分が手に入れられるものはとことん手に入れて出す。これは本物じゃなきゃダメね。 ・バカにされるかもしれないけど、「江戸」って書いてある紙をテレビで言うテロップ、いきなり見た瞬間に何かがわかるようにしてある。つまり、自分の授業が何時代の何かわかるようにわざと書いて置いておく。子どもは常に何時代かを意識しながら授業が展開される。 ・地理なんかは特にそうだけど、見ていないものを伝えるのは見て伝えるものに叶いっこないです。話の中にリアリティを持たせないと、薄っぺらいと面白くないですよ。
その他	・保護者の対応はやたらいいです。うまい。私は最後テレビはクレームを聞くために地方に行って謝って和解して戻ってくるし、最後の仕事。プロデューサーにこういう仕事を快くやれるテレビ人はいないと言われた。

また、B 教師は、社会科について例えば次のように語っている。

※：今は地歴公民全部やられているんですか。

B：今は 3 年持っていないので公民以外をやっています。ただ、私は見せることには拘りを持っている。どう見せるかどう構成するか 50 分の授業の中でどう驚かせて刷り込むかとかには徹底的に拘りますよ。

※：資料の提示の仕方ということですか。

B：テレビは1つのものとして仕上げなきゃいけないから、そこにホコリ1つつけない完璧なものを出したいと思う。ただそれが、面白い、楽しい、すごいかじゃないですか。(テレビの話です) それを見て視聴率を稼ぐところに長くいたから、見せ方はこだわる。

B 教師は、教師には教えなければいけない(つまり内容は先に決められている)が、それに関するどの内容をどのような切り口から教えていくかは教師に任せられていることを挙げ、社会科の教育内容を50分の中で生徒にどのように“リアルに・面白く”見せるかという点に拘りを持っている。具体的に、B 教師は「歴史の授業でなるべく本物を持ってきて見せること」や、「子どもは常に何時代かを意識しながら授業が展開される」ことをねらいとした、本時のテロップの活用などをしていると語っている。

また B 教師のコメントには、社会科を“人の生き様”を通して学習を進める教科であると捉えていることが分かる箇所もあった。B 教師は、歴史上の人や諸地域に住む人がどう生きてきたかを知ることが大切であり、さらに、教える側の人(つまり教師)の見方や考え方が学習に影響すると言う。“人”を扱うことで、人との関わり方を示したいという社会科の教育観が彼にはあるのである。

(3) B 教師のライフストーリーと教育観の関係

このような B 教師の教育観は、明らかに民間企業で培った、人の生き様をリアルに面白く視聴者に伝えるためのノウハウ、そして、そこへの拘りが大きく影響している。つまり、民間企業での経験が、社会科教育観の形成要因と言える。しかし、この「リアルに面白く」という部分は、あくまで教育内容の見せ方・伝え方への B 教師の拘り、つまり授業技術・手法への拘りである。そこには「公民的資質の基礎を養う」という社会科の教科の理念や目標の達成への B 教師の意識や拘りは曖昧にしか見えてこない。

VI ケース③ ―教師になることを念頭において民間企業へ就職した C 教師―

(1) C 教師の語るライフヒストリー

C 教師は、東京都の公立中学校で働く現在教師歴5年目の教師である。社会科教師をする以前は民間企業1社に計7年務めていた。民間企業では、教育関連の会社に勤め、入社から人事部で新卒採用や制度・給与に関わる業務に従事していた。これまで、中学校の社会科では地理歴史公民を全て担当しており、現在は1・2年生の「地理」と「歴史」を教えている。C 教師の語りを基に、等至点、分岐点、必須通過点、社会的方向づけ、社会的ガイドを抽出し、TEMにより図化したのが【図3】である。

C 教師は、両親が教師であったことが強く影響して、〈教師になりたい〉という思いを持っていた。そして、「教科として社会科が一番好きだった」ことから、〈社会科の教師になりたい〉と思っている。また、C 教師は、小学校や中学校での先生との関わりから、「中(学校)に関しては、良い先生も私にとっての悪い先生もいて、ある意味ではこういう先生にはなりたくないとか、こういう先生にはなりたくないなって」と、自分がなりたい理想の教師像や、なりたくない教師像を抱いている。その後、社会科教師になるため、〈中高の社会科免許を取得する〉ことのできる大学を選択している。その際、〈周りが教員しか知らない人生が嫌だ〉という思いから、教職志望者が多く集まる教育学部ではなく、〈社会科の免許が取れ〉かつ、社会科の中でも興味があった法律を専門的に学ぶため、法学部に進ん

レベルまで行けば社会人として通用するのかということ自分の目で見ることができたことに、企業経験をしたことの良いを見出している。

C 教師は、〈結婚〉を機に再度自分のキャリアプランを考えることになったという。その際、〈教員免許を持っている〉こと〈転職するなら女性は 30 手前と考えていた〉こと、そして、大学時代の友人に「教師にならないの？昔言ってたのにいいの？」と言われたことがより深く考えるきっかけになったという。一方で、「今までの時代（父親が働いていた時代）は教師はよかったがこれからは大変やぞ」という教師であった〈父親からの言葉〉では、現在の教育実態を踏まえて教師はこれから大変になるということを伝えられ悩んでもいる。しかし、考えた末〈学生時代の友人からの言葉〉などが後押しとなり、〈社会人枠で教員採用試験受ける〉に至っている。

（２）C 教師が語る自身の民間企業経験の教科指導への影響

C 教師は民間企業での経験について下記【表 5】のように生かされていると語っている。

【表 5】C 教師の民間企業経験の活用に関する語り

社会科授業	・「社会科の授業ではやっぱり、あれですね、世間一般の肌で感じてきた部分を自分の言葉で語れる。地理とかも採用関係で大学訪問とかいろんなところにいったので、行ったことあるよっていうのは強いかなって。教科書で追って喋るのではなくて場合によっては実際に行った写真を見せたりしながら自分の言葉で喋る。」 ・「経済は自分が肌で感じたものを話せるのはすごくありますね。景気変動したのが業績に影響したとかね。何気なくどんどん話しているんだと思うんで、これを話そうとかおもって話しているわけではないので。株式会社の仕組みとかは、前が自分働いていたので話せる。株主総会の準備手伝ったりもしたので。」
その他	・「保護者対応。あとは事務作業。パソコンの事務めっちゃくちゃ早いですよ。ほかの先生からもよく言われます。前の職業でよく使ったので。」 ・「対保護者に関しても、なんかこう、教員だけやっているよりいろんな業種や職種とかを理解できているのでそういう話ができるっていうのもあります。」

また、社会科について、例えば次のように語っている。

※：あの、社会科の授業で身に付けてほしいことはありますか。
C：（力強く）社会科の授業で一番身に付けて欲しいと思っていることは、自力で資料を読み取る力。自分の力で資料を読み解いて、もっと言えば資料を読み取り活用する力だなと思っています。
※：どうしてそう思われたんですか。
C：現実の社会に得た時に、生徒によく言うんですが。日本の社会ってお金を取るときは勝手にとっていくけど返ってくるときって請求しないと何にも返ってこないんですよね。まあ、人事の仕事やっていたから余計に思うんですよね。でも、請求すればくれるんですけど請求しない人ものすごく、結構多いんですよ。制度を知らないから。ある意味損してる人ですよね。私が思うのは、世の中に出てから制度を知ってるか知らないかはすごく差ついてきちゃうっていうのがあって。社会の授業って資料を読み取って活用することが多いんで、それができれば、うーん仕事もできるし働いていけるし生きていけると思うんですよ。
※：それは大学時代の教実習でも思われていたことですか。それとも企業に入ったから思うことですか。
C：あーそれはやっぱり、企業に入ったからこそ思っていることだと思います。

これまでの2名の教師同様に、C教師も民間企業での経験を実体験のともなった小話として活用していると話していた。また、同様に授業以外でも保護者対応や進路指導、事務作業においても民間企業での経験が生かされていると言っている。だがC教師は、社会科について、他のA教師やB教師以上に詳しく、かつ多く語る傾向にあった。C教師は、社会科という教科を、世間（社会）を知る入口であると考えていた。また上記にもあるように、C教師は、社会科の授業の中で資料を読み取り、活用する力を身に付けさせたいという社会科の教育観がある。具体的には、社会科授業の中で資料を生徒に提示し、“何が書かれた（何を表した）資料なのかを読み取らせ”、“そこから問いに対して考えさせ”、“何らかの形で表現させ”ようとするのである。また、C教師は社会科の授業も含め中学校での教育全体を通して社会に出て独り立ちできる子を育てたいという教育観がある。

（3）C教師のライフストーリーと教育観の関係

このようなC教師の教育観はどのように形成されてきたのだろうか。C教師のライフストーリーを追いかけると、多くは民間企業で人事部として働いた経験から形成されていることが分かる。例えば、C教師が、資料の読み取りができるようになって欲しいという信念の背景には、民間企業での人事部働く中で、立派な社会人であっても「制度を知らない人多すぎ」、そのせいでお金が返ってきていなかったり、生活環境が厳しくなったりした人を数多くみてきたことが影響している。そのため、「まずは資料を読み取ろうとする姿勢を」、そして読み取る能力、それを活用する能力を身に付けさせたいと考えているのである。これについては、C教師自身も「企業に入ったからこそ思っている」と語っていることから明らかである。またC教師の、民間企業に行かずそのまま新卒で教師になっていたなら「おそらくなんですけど、社会に出て一人でやっていく、生きていけるような人っていうのが何なのかわからなかったと思う」、企業で働いて「いろんな社会人を見て、将来子どもたちが歩く道を、自分の目でたくさん見れた（ゴールのなもの）のは大きいな」という語りからも分かるように、当たり前のことができない人は社会に出て通用しないということ、そして、どれぐらいのレベルまで行けば社会人として通用するのかということを目で見れたことで、よりリアルに“社会に出て独り立ちできる子を育てたいという教育観”を持つことができていると考える。

Ⅶ おわりに

本研究の目的は、民間企業経験を持つ社会科教師へのライフストーリーの聴き取りを通して、民間企業等での勤務経験がその教師の社会科教育観の形成や社会科授業にどういった影響を及ぼしているのかを明らかにすることであった。そこからは3つのケースがあることが明らかになった。1つ目は、民間企業経験がほとんど教科指導などと結びついていないケース。2つ目は、民間企業経験が影響しているが、教師の授業におけるテクニックと結びついていないケース。3つ目は、民間企業経験が教師の社会科の指導方針と強く結びついたケースである。1つ目は、A教師のケースが該当する。2つ目は、B教師のケースが該当する。3つ目は、C教師のケースが該当する。

こうした違う結果が見られることになった原因には何があるのか。事例が少なく断言はできないが、仮説的に言えることは、民間企業経験をしていく中で自らの社会科の指導方針のヴィジョンを導き出せた者は、民間企業経験が教科指導にはっきりとした影響を及ぼすが、そうでない場合、その影響は限定的になる、というものである。そして民間企業経

験を通してこうしヴィジョンを持つことができるかどうかを決定する一つの大きな要素は、教師になることを意識して民間企業での日々の経験を省察する機会をその時に有していたかどうか、という点にある可能性がある。

近年、教師の世代交代が進み教員養成、教師教育が一層重要となってきた。北田（2014）は、教師の専門性とは、決して単に専門的知識や技能を数多く獲得することにあるのではなく、その知識や技能が、誰の、なんのためにいかされるべきなのかという明確な「ヴィジョン」と強い「動機」と結び付き機能するなかにこそ見いだされるのではないかということを示唆している。本研究においても、教師は単に民間企業経験という多様な経験があっても、社会科教師としての明確なヴィジョンを抱こうとしないのであれば、民間企業経験が有効に影響する範囲は保護者対応や事務に限定され、なかなか教科指導にまで影響をもたらさないかもしれない可能性を示唆している。

【参考文献】

- 斎藤剛史（2014）「教員採用試験で増える社会人の「特別枠」」『ベネッセ 教育情報サイト』<https://www.benesse.jp/kyouiku/201403/20140306-3.html>
- 北田佳子（2014）「校内授業研究で育まれる教師の専門性とは一学習共同体における新任教師の変容を通して一」日本教育方法学会編『授業研究と校内研修：教師の成長と学校づくりのために』図書文化社、2014 年。

【註】

- 1 文部科学省ホームページ http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1381761.htm
- 2 「世間知らずの教職員に民間研修が急増中 接客業、電話応対、果ては大型船の操舵まで」『産経ニュース』（2015 年 10 月 13 日付け）
<https://www.sankei.com/life/news/151012/lif1510120004-n1.html>
- 3 ライフストーリーに近い概念としてライフヒストリーがある。ウヴェ・フリックは、ライフストーリーとは「ある人が自分の生について口頭で語った物語」であり、ライフヒストリーとは「口頭で語られたライフストーリーや、書かれた個人記録といった資料から再構成されたある人物の生の歴史」を意味するとしている（詳しくは、ウヴェ・フリック著、小田博志・山本則子・春日常ほか訳（2011）『新版 質的研究入門—〈人権の科学〉のための方法論』春秋社、656 頁）。つまりライフストーリー研究とは、被験者のナラティブ（語り）に特化し、そこから彼らのライフヒストリーを読み取っていく調査である。
- 4 TEM 図とは複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model) 図の略称である。詳しくは、安田裕子・サトウタツヤ編（2012）『TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開—』、誠信書房。
- 5 安田裕子・サトウタツヤ編『TEM でわかる人生の径路』5 頁。